

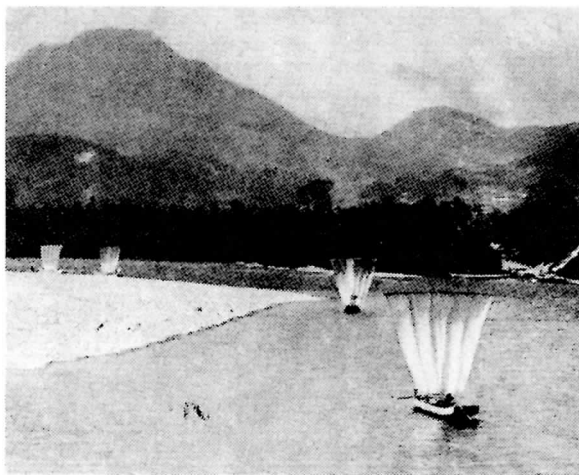
「自然」に生きる

1、帆 かけ 舟

世に「所変われば品変わる」というが、風土の異なる東洋と西洋では、ものの考え方に大いに異なるところがあると思うのである。それは、人間の自然をみる目の違いによるのではなからうか。

広島は、水の都ともいわれ、市街地を太田川が分流して瀬戸内海に注いでいる。この川は、ときに洪水で恐怖の川にもなったが、ふだんは物資の輸送など水運に利用され、生活に密着した川でもあった。昨夏、この川に、昔なつかしい帆かけ舟が浮かべられた。それは、広島青年会議所の、文化活動の一環として復元されたものである。そして、太田川の花火大会の夕べに、その姿を川辺にみせてくれたのである。

かつては、このような帆かけ舟が、可部のまちからお客を乗せ、川の流れと川風にまかせて、相生橋のたもとまで下っってい



太田川の帆かけ船（大正10年 中国新聞より転載）

たのである。それは、昭和十年頃までの、太田川の風物詩の一つであったという。しかし、今は、この帆かけ舟にかわって、エンジンの音かしましく、若者をのせたモーターボートが、平和大橋や相生橋の下をかけぬけていく新しい時代になった。

ここで、われわれは、東洋と西洋の考え方の相違点を、これら帆かけ舟とモーターボートの機能から考えてみたいと思う。

一般に、西洋では、自然と人間を対立的に設定し、そこから、対峙する自然を観察・実験してその理を窮め、それを利用しようとする。ここに、科学的合理的精神も生れるのである。ここから考えれば、流れる川の理を窮め、急流にも逆行できる機能を備えたモーターボートの出現は、まさに、西洋的な科学的合理的精神の所産だといえるであろう。

これに対して帆かけ舟は、決して、自然を向うにまわして、これを征服利用しようという考えから生れたものではない。それは、あくまでも、川の流れと吹く風にまかせて運行するという、自然と一体となり自然と調和した考え方から生れたものなのである。とすれば、帆かけ舟は、自然の理にすなおに従うという、東洋的な考え方の産物だとみてよいと思うのである。

かくて、自然を人間と対立するものとしてとらえる西洋的立場からは、科学的合理的なものの考え方が生れてくるのに対し、自然に逆らわず、その理に従って生きようとする東洋的立場からは、調和的融合的なものの考え方が生れてくると思うのである。